

(様式 2)

## 「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書 (参加学生)

平成 24 年 12 月 4 日

所属：教育文化学部 国際言語文化課程 2 学年

氏名：佐々木 美祐

研修先大学・機関名等 (国)：ケニヤッタ大学、マトマイニチルドレンズホーム (ケニア)

在籍身分：研修生

渡航年月日： 2012 年 9 月 1 日

帰国年月日： 2012 年 9 月 22 日

### ○研修先での学習内容等

- ・ 孤児院滞在
- ・ 村落開発のサポート
- ・ ケニヤッタ大学での日本や秋田を紹介するプレゼン

### ○研修期間の生活面について

ケニアでの生活は想像以上に日本と違っていました。水道の水はそのまま飲めない、シャワーも水しか出ない、ガスもないから火を起こしてかまどで料理する、大学のトイレでさえバケツで水を流す、洗濯はすべて手洗いなど、日本人から見ると大変な生活でした。しかし、彼らにとってはそれが生まれた時からあった当たり前の生活で、逆に日本のように生まれた時からすべてが揃っているような国のほうが珍しいのかなと感じました。

### ○研修期間全般にわたる感想

最初はまるで映画のなかにいるようでした。見る物すべてが新鮮で、私はケニアにいるのだという実感はなかなかわきませんでした。たくさんの人々と出会い、交流していく中で、やはりここは日本ではないのだということ強く感じていきました。

ケニアには朝 5 時ごろに到着し、そのままマトマイニ・チルドレンズホームという孤児院に行き、一週間ほど滞在しました。マトマイニは日本人が経営していて、両親または片親がいない 14 人子供たちがおり、今年で 26 年目を迎える孤児院です。ケニアに行く前、メンバーで「最初の一週間は辛抱だよ！」と話していたほど、孤児院での生活は心配がたくさんありました。まずはどんな生活になるのか全く想像がつかず、子供たちもどんな子たちなのか、言語という壁を越えて仲よくなれるのかなど、マトマイニへの道中もドキドキしていました。しかし、そんな心配は全く不要でした。生活は日本と違うことがたくさんあり、驚くこともありましたが、子供たちと過ごす時間がそんなことを忘れさせるほど、幸せな時間でした。食事は、ウガリ(トウモロコシの粉でつくる、味のないポテトサラダのようなもので、ケニアの主食の一つ)や、

(様式 2)

豆、野菜が中心のケニアらしいもので、朝食には毎回しぼりたてミルクで作ったチャイが出ました。水は水道からは飲めず(子供たちは平気で飲んでいました)、シャワーは水しか出ないので、大きな窯でお湯を沸かし、バケツにくんで使いました。トイレは、洗面などで使った水をためておいて、バケツでその水を汲んで流します。洗濯機もないので、洗濯物はすべて手洗います。慣れてしまえばそんなに大変ではありませんでしたが、ずっとそのような生活を続けるのは大変だろうなと思いました。しかし、私がマトマイニで学んだことは、たとえ何もなくても、そこに誰かがいるだけで幸せなのだということです。マトマイニには、遊具もないし、ゲームもない。でも、そこに子供たちがいて、一緒に遊んで、歌って、笑って、手と手が触れるだけで本当に幸せな時間が流れます。私はそのゆっくりと流れる時間が大好きでした。この幸せは日本にもあると思います。でも、日本はものがあふれすぎて、皆そんな幸せを忘れてしまっていると思います。この気持ちをずっと忘れずにいたいです。

マトマイニの滞在中に、スラムに行く機会もありました。行く前は、スラムというと、汚くて、暗くて、犯罪がはびこる危険な場所というイメージでした。しかし、今は全くイメージが変わりました。確かにそこらじゅうにゴミが落ちているし、下水はすべて一本の川に流されていて、環境はいいとは言えません。しかしスラムに住む人々は、明るく私たちを歓迎してくれ、生き生きしていました。明日をよりよくしようと活動している青年団もいて、様々な知恵を使って日々進歩しようとしている姿は、カッコいいなと思いました。

また、JICAに行く機会もありました。JICAは、ケニア政府の活動をサポートする役割を担っているため、国レベルの比較的大きな事業を行っています。一方、私たちが滞在していたマトマイニでは、人々や子供たち一人ひとりに対する、小さな活動をしています。この二つの活動を見て、支援にもさまざまなレベルがあるということを知りました。しかし、どちらも大切な働きだとも感じました。

最初の週末にはマサイ・マラ国立公園へ、サファリに行きました。生で見る野生動物の迫力と美しさは忘れられません。自分がいるのがもったいないと思う程、素晴らしい景色でした。しかし、ここでは少しトラブルもあり、大人を相手に議論しなければならないことが多々ありました。そんなとき、自分の英語力のなさにイライラしてしまいました。まだまだ磨かなければ！と、決意をあらたに帰ってきました。

二週目は、ナニユキという村で村落開発をしている日本人の方と活動してきました。ここでは、日本の農業や、日本人の考え方などに関するプレゼンテーションと、子供たちに環境問題を考えてもらうためのブックレット作りをしてきました。少しですが、わたしたちが残してきたものが、何かいい方向につながればいいなと願っています。

三週目はケニアウッタ大学に滞在しました。ケニアウッタ大学は、まるで一つの町のように広がって、驚きました。外を歩けば、珍しがられて次々に話しかけられ、様々な人がいて、面白かったです。授業風景などを見学するのをとても楽しみにしていたのですが、残念ながら見る事ができませんでした。なぜなら、教員がストライキをしており、学校が始まっていなかったからです。予定がずいぶんと変わってしまい、残念でしたが、教員が校内でデモをする様子など

## (様式2)

を見ることもでき、ケニアの労働状況なども考えるきっかけにもなったので、今となっては良い体験だったと思います。ケニアッタ大学では、JAPAN FAIR を開催しました。前日に浴衣を着て校内を宣伝して回ったかいもあり、たくさんの学生が参加してくれました。日本、秋田県、秋田大学に関するプレゼンテーションのあと、浴衣の着付けや、習字、お茶、箸など、日本の文化に実際に触れてもらいました。特に箸を使うゲームは大好評でした。わたしたちにとってはいつも使っているものですが、多くのケニア人にとっては初めての体験のようで、楽しんでいる姿を見て、こんな何気ないものでも、立派な文化の一つなのだなと感じました。

22 日間で、たくさんの人に出会い、様々な生活環境を体験しました。その中で一番考えたことは、幸せとは何かということです。ケニアの生活は、日本に住む者から見たら大変な部分が多々あります。しかし、彼らにとってはそれが生まれつきある環境で、もしかしたら大変だと感じていないのかもしれませんが。素敵な笑顔にもたくさん出会いました。

まだ、この問いの答えは出ていません。しかし、ケニアに行かなければこのような視点は持てなかったと思います。ケニアの文化を体験し、人々と交流し、日本を外から眺めることで、様々なことを考えるきっかけになりました。これからも、もっと異文化に触れて、自分の考えや、心を豊かにしていきたいと思います。

### ○今後の勉学計画

この一か月の研修の報告会をしたときに、同時に同じケニアに一年間留学していた先輩の報告も聞いて、一年間留学するとさらに経験の広さも深さも増すのだと感じ、一年間海外に留学しようと決めました。大学生のうちに積極的に海外へ出て、異文化に多く触れたいと考えています。